

2209 離島覚書（鹿児島県・奄美大島／瀬戸内町）



瀬戸内町の中心・古仁屋の市街地、沖に横たわるのが加計呂麻島

令和4年7月12日

瀬戸内町役場

8時30分に請島から本島（奄美大島）に戻る。レンタカーを借りて瀬戸内町内を回る計画で、クロウサギレンタカーに予約を入れていた。このレンタカー会社は奄美空港の近くに営業所があるのだが、古仁屋まで配車してくれてサービスがいい。おそらく空港で借りて古仁屋で乗り捨てた車を有効に活用しているのだろう。8時45分に駐在所脇の駐車場で待ち合わせるようになっていた。定刻に女性が軽自動車をもって現れた。

すぐに瀬戸内町役場に向かう。役場の駐車場に車を置き、2階の企画課を訪ねた。ここで町政要覧をいただいた。建設課で請島と与路島の管内図をコピーしてもらった。1枚50円なので100円を会計課に支払った。農林水産観光課では請島と与路島の港の区分や町内の養殖業について話を聞いた。また、「まんदै」という加計呂麻島と請島・与路島を紹介した冊子を購入する。

瀬戸内町は1956（昭和31）年9月1日に旧古仁屋町（本島側の南半分、小名瀬より南）、旧西方村（本島側の北半分、阿室釜より北）、旧鎮西村（加計呂麻島の南半分と請島、与路島を含む）、旧実久村（加計呂麻島の北半分）の1町3村が対等合併して発足した。なお、瀬戸内町の本島側は旧古仁屋町と旧西方村であり、旧鎮西町と旧実久村は2次離島に相当する。

瀬戸内町の本島側は、奄美大島と加計呂麻島を隔てる大島海峡に面する集落と太平洋側の佐須湾に面する集落で構成されるが、大島海峡側に位置する集落の方が圧倒的に多い。大島海峡はリアス式海岸が連なり、海岸線に沿って集落が点在している。また加計呂麻島が風よけになって大島海峡は比較的静穏である。こうした環境が瀬戸内海に類似していること

から、瀬戸内町と名付けられたのかもしれない。

瀬戸内町の奄美大島本島部の面積は 137.12 km²、海岸延長は 143.7 km である。2015 年国勢調査時の人口は 7,614 人、世帯数は 3,649 戸であった。

瀬戸内町の人口のピークは 1927 (昭和 2) 年の 18,751 人である。当時は後述するように軍関係者が多かったこともあるが、現在はピーク時の約 4 割に減少していることになる。なおこのころは古仁屋に一極集中することなく、南部の嘉鉄^{かてつ}や阿木名^{あぎな}の集落の人口は 1,000 人を越えていた。そして戦争をはさんで人口は減少の一途を辿ってきたわけだ。



瀬戸内町役場の外観 (左)、大島海峡 (対岸が加計呂麻島) (右)

町立図書館

役場から車で 5 分ほど走ると、町立図書館に着いた。地方港湾・古仁屋港南部の埋立地に位置し、近くには瀬戸内警察署や特養老人ホーム「奄美の園」などがある。車を裏手の駐車場に停める。

図書館の 2 階部分に町立郷土館が併設されている。最初に 1 階にある図書館に入り、郷土コーナーで与路島と請島に関する図書を調べ、下記の文献をコピーした。

屋崎一 (2002) : 与路島誌

与路小 90 周年記念事業推進委員会 : ふるさとの今昔、与路島誌

町健次郎 (2007) : 請島ノート、瀬戸内町立図書館郷土館紀要第 2 号。

石原清光 (2006) : 奄美与路島の「住まい」と「空間」、第一書房

鹿児島県 : 奄美諸島の概況

瀬戸内町 : 瀬戸内町誌、歴史編

この図書館は人口 1 万人弱の町にしては異例と思われるほど充実していて、2 階に郷土館がある関係もあってか、「町さん」という学芸員が配置され、「図書館郷土館紀要」も定期的に発刊されている。また郷土コーナーには小説家・島尾敏雄の夫人であるミホさんが寄贈した島尾の蔵書が並び、島尾がどんな本を読んでいたのかがわかる。ちなみに島尾の蔵書は名瀬市の県立奄美図書館にも保存されているそうだ。

島尾敏雄は戦争中、特攻艦・震洋の指揮官として加計呂麻島に駐留、この島で小学校の教師をしていたミホさんと結婚した。戦後、戦争中の体験を描いた作品群を執筆、東京に移るが、ミホ夫人が精神に異常をきたしたため奄美に移住する。高校で教鞭をとりながら執筆活

動を続け、県立図書館奄美分館の初代分館長を務めている。島尾の代表作である「死の棘」は島尾の不倫を契機に精神の異常をきたしたミホ夫人をめぐる私小説であった。このように島尾と瀬戸内町は深い関係にあることから、図書館を入った正面には「島尾文学コーナー」が設けられ、島尾の生涯の写真と著書が展示されている。



町立郷土館が併設されている図書館（左）、図書館内の島尾文学コーナー（右）

町立郷土館

文献をコピーしてもらう間に2階の郷土館を訪ねた。入館料は不要である。

館の入口にはサトウキビを絞るために使われた木製と鉄製の圧搾機が置かれていた。長い棒の両側を牛や馬に曳かせて回転させた。

郷土館の展示内容は、アマミノクロウサギやハブなどの奄美の自然、町指定の文化財、瀬戸内町の写真や先人たち、諸鈍^{しよどん}シバヤなどの祭りに使われる紙面（紙で作られた仮面）、農林漁業などの島の生業や生活、ノロの祭祀具、壺と甕、厨子甕などが展示され、内容は多岐にわたっている。ひととおりに見て歩いた。

ちょっと目を引いたのがアオリイカなどを釣る時に用いられる餌木^{えぎ}である。餌木は地域によって様々なものがあり、一部には芸術品のようなものもある。若い時に全国の餌木を収集し、まとめた本を見たことがあり、その美しさに感動したことがあった。瀬戸内町には山本一彦さんという現代イカ餌木作家がいるようで、彼の作品が展示されていた。餌木の背中の部分にはご丁寧にヤコウガイの螺鈿が貼られている。山本さんは1995（平成7）年に東京から奄美大島に移住、養殖業に従事した後、釣り業界に転身し、エギングの面白さにひかれて4年前より餌木を自作するようになったとのことだ。

もう一つ興味深かったのはサワラ突き漁の漁具だ。奄美地方ではサワラ（カマスサワラ）が代表的な魚種であるが、このサワラの伝統的漁法は餌木を流してサワラを寄せ、近づいてきたところを三又の銚で突いて獲った。イカ用に較べると2回りほど大きな餌木と錆びた銚が展示されていた。

奄美大島の漁業はカツオ一本釣りを除くと、地先海域での漁業が中心だった。魚垣漁、潜水漁業、追い込み漁の写真や使用した小舟、道具類が展示されていた。

1階の図書館に戻り、依頼してあった図書のコピーを受け取って、瀬戸内町内をまわることにする。



郷土館の入口に置かれているサトウキビの圧搾機（左）、漁具の展示（右）

旧古仁屋町南部

図書館を出て、県道 626 号を大島海峡に沿って南下し、島の南端に向かう。

市街地を離れて最初の集落が清水（157 戸、240 人、2022 年 6 月末住基台帳、以下同）で、ここを過ぎた先端にマネン崎展望所がある。駐車場に車を止め、展望所から海峡の風景を眺める。ここからは大島海峡とその先の加計呂麻島、さらに嘉鉄湾と嘉鉄の集落が一望でき、素晴らしい眺めである。

嘉鉄（114 戸、198 人）の集落は海岸線に平行に形成され、集落の前には白い砂浜が連なる。その沖にはサンゴ礁の海がコバルトブルーに輝く。続いて「ハートの見える風景」と書かれた展望所に立つ。ちょうど嘉鉄の集落を反対側から一望する位置だ。嘉鉄湾はハートの形をしていることから、この展望台の名前が付けられたのだろう。集落の背後にはかなりまとまった農地があり、ビニールハウスも見られた。

国道 626 号はいったん内陸部に入り、峠を越えた次の集落が蘇刈（55 戸、86 人）になる。この集落は海岸線に沿って帯状に形成され、背後の山側に農地が連なる。嘉鉄も蘇刈の集落も漁港がないので、漁業は営まれていないと思われる。

蘇刈から皆津崎に向かう途中は細くくびれていて地峡を形成している。この地峡部にクルマエビの養殖が営まれていたと思われる養殖池が 5 つ並んでいた。地峡部の太平洋岸はホノホシ海岸といい、丸く研磨された人頭大から拳大の石が敷き詰められ、特異な景観を有している。ここは観光地になっており、駐車場やトイレが整備されている。歩くと少し距離がありそうなので行くのをやめた。地峡部の大島海峡側は砂浜が広がり、その沖合にサンゴ礁が連なる。

クルマエビ養殖場跡地の先の大島海峡側がヤドリ浜である。ここが瀬戸内町の南端で、県道は行き止まりになる。美しい白い海岸が続き、海の透明度は高い。この砂浜はウミガメの産卵場になるらしい。駐車場に車を停めて砂浜にでると、10 数人の海水浴客がいた。この浜は奄美大島の代表的な海水浴場であり、シュノーケリングスポットになっているらしい。このため近くにはトイレとシャワー室が整備されている。

ヤドリ浜の一角には「アマミホシゾラビレッジヤドリ浜」や「ザシーン」というリゾートホテルがあり、瀬戸内町の観光地になっている。

ヤドリ浜で U ターンし、クルマエビの養殖施設跡をしばし眺める。



嘉鉄の集落（左）、ヤドリ浜（右）

クルマエビ養殖場跡

クルマエビの養殖場は大島水道側の干潟を掘削して堰堤を築き、養殖池を造成したものである。しかし、現在は養殖が行われていないようで、砂留用の矢板の一部は壊れ、堰堤が崩れている部分もある。

通常、この時期は水を干し揚げて、養殖場の底砂を日光消毒する時期にあたるが、水は貯まったままだった。おまけに近くの事務所のような建物は閉鎖され、売物件の看板が立つ。どうやらこのクルマエビ養殖場は放棄されたものと推定される。池には水車を廻す動力装置に電気を送るための電柱がたくさん立っていて、異様な雰囲気である。

養殖池の海側には取排水口が築かれ、周りには外から魚などが入ってこないように円形状に網が張られている。潮汐の干満差を利用して養殖池の海水交換を行っていたのだろう。海水をポンプアップすると動力費がかさむから賢明な措置と思われる。網の前には魚がちよろちよろ泳いでいた。

2018年漁業センサスによると、瀬戸内町にクルマエビの養殖経営体が1社あることになっているので、その後廃業したのだろう。

島旅から帰って調べてみると、ここでは、(有)大島くるまえび養殖場が1976（昭和51）年に操業、次いで1988（昭和63）年には(有)さくら水産が加わり、2社でそれぞれクルマエビ養殖を行っていた。しかし2018（平成30）年9月に(有)さくら水産が倒産、さらに2019（平成31）年12月には(有)大島くるまえび養殖場も倒産した。倒産の原因はわからない。以来、放置されてきたのである。5つの養殖池のうち、北側が(有)大島くるまえび養殖場、南側が(有)さくら水産であった。

この養殖場の土地はもともと干潟だったところを掘り、堰堤を築いてクルマエビの養殖場を造成したものだ。干潟は公有水面なので、養殖業者は年間220万円を支払って鹿児島県との間に専有契約を結び、クルマエビ養殖を営んでいた。そして事業から撤退する場合は元の海岸に戻ることが契約条件になっていた。しかし会社が倒産したために復旧工事をするための資金がなく、放置されたままになっているようなのだ。養殖池の北側に種苗生産施設らしき建物があったが、無人のため調査できなかった。

奄美大島には、宇検村、大和村、奄美市笠利地区にそれぞれクルマエビ養殖場があるが、瀬戸内町の2業者と奄美市住用地区のクルマエビ養殖は近年廃業しており、経営の厳しさ

を物語っている。



干満を利用して海水が出入りする取排水口（左）、電柱がそのまま放置されている養殖池（右）

伊須湾

県道 626 号を古仁屋方面に戻り、蘇刈の集落を過ぎてから峠の辺りを右折して、坂を下り切ったところが伊須湾である。この湾は太平洋に面している。伊須湾の海岸沿いに伊須、阿木名、勝浦、網野子、節子の 5 つの集落が形成されている。

坂を下った最初の集落が伊須（22 戸、32 人）である。旧古仁屋地区のなかでは、後述する小名瀬、嘉徳に次いで下から 3 番目に小さな集落である。集落の前には長い砂浜が続き、港はない。砂浜に漁船 2 隻と船外機 2 隻が引き揚げられていた。

伊須から伊須湾岸にそって湾奥に向かい、最も奥まったところにある集落が阿木名（東と西に分かれていて 378 戸、728 人が住む）である。瀬戸内町で最も長い阿木名川沿いに発達した集落で、背後の川沿いにはまとまった比較的広い農地がある。人口は 3 棟の県営住宅などがあることから、古仁屋に次いで多く、伊須湾側の最大の集落である。集落内には阿木名小中学校が置かれている。阿木名小学校の令和元年 4 月時点の児童数は 69 人で、古仁屋の市街地にある古仁屋小学校に次いで多い。

海岸沿いに「重野安禪の碑」と書かれた木柱がたっていた。その脇に重野に関する記述があったので要約しておこう。

重野は 1827（文政 10）年に薩摩国鹿児島郡鹿児島近在坂元村生まれた。1839 年（天保 10 年）に薩摩藩の藩校・造士館に入学。1848 年（嘉永元年）には江戸・昌平黌の生徒になり、塩谷宕陰（1809～1867、儒学者）、安井息軒（1799～1876、儒学者）などの教えを受けた。1857 年（安政 3 年）に薩摩に帰国するが、同僚の金の使い込みにより奄美大島に遠島処分された。その地がこの阿木名だったのである。重野の乗った船は大島海峡沿いの久慈に着き、上陸後勝浦を経て阿木名に移り住んだ。当時、龍郷に流謫中であった西郷隆盛とは相互に訪問し合っていたという。

1863 年（文久 3 年）に赦免されるまでの 6 年余、地元有志の要請を受け、青少年に学問を教えるために私塾をこの地に開く。阿木名は「学者村」と呼ばれ、優秀な人材を輩出する集落として名をはせたといわれている。門弟には泰山英俊、鼎祥喜、森賢省、泉長旭、南喜美隣などがいるという。

重野は薩摩に戻り、翌 1864 年（元治元年）に造士館史局主任に就任、島津久光の命により『皇朝世鑑』を著す。また生麦事件を発端とする薩英戦争の終結にむけて、イギリスと交

渉した。その後、歴史家、漢学者として近代史学の礎を築いたという。日本で初めての文学博士で、東京帝国大学の名誉教授であった。

伊須湾の西岸に勝浦（84戸、133人）、網野子（60戸、83人）、節子（147戸、179人）の3つの集落があり、湾の外に嘉徳（15戸、19人）の集落があるが、時間の関係で回れなかった。この4つの集落には何れも港はなく、もともとの生業は農業だったと推察される。



伊須の海岸（左）、伊須湾の湾奥と阿木名の集落（右）

古仁屋市街地

阿木名から国道58号を古仁屋に戻る。

古仁屋は名瀬に次ぐ奄美大島第2の都市である。このように大きな街に発展したのは南方進出の前進基地として1923（大正12）年に奄美大島要塞司令部が設置され、軍都として位置づけられてからである。古仁屋には、「奄美大島要塞歩兵第28中隊」「奄美大島重砲兵連隊」「陸軍病院」「要塞通信隊」「憲兵古仁屋分遣隊」などの軍事施設が配置された。そして後述する事例のとおり、瀬戸内町の各地に当時の軍事関連施設が数多く残されている。ちなみに瀬戸内町教育委員会は2014（平成26）年から瀬戸内町近代遺跡調査委員会を組織し、これらの遺跡を調査し、報告書にまとめている。

1890（明治3）年の古仁屋の人口は339人に過ぎなかったが、要塞司令部が置かれて以降の1927（昭和2）年には4,611人に膨れ上がった。

戦後、軍事施設はなくなったが、形成された市街地は残った。現在の県立古仁屋高校はかつての要塞司令部であり、古仁屋中学校は当時陸軍病院が置かれていたところだ。

しかし、古仁屋は1958（昭和33）年12月27日に大火に見舞われる。1,357世帯、5,311人が被災し、1,628棟の建物が焼失した。現在の市街地はその後整備されたもので、コンクリートの家が多いのはそのためだろう。

軍都の歴史は今でも残っており、海上自衛隊奄美基地分遣隊が古仁屋に置かれている。

現在、古仁屋は奄美大島の南の玄関口であり、地方港湾の古仁屋港が整備されている。古仁屋港は鹿児島港から各奄美群島を經由して沖縄県の名瀬港を結ぶフェリーの航路の寄港地である。また加計呂麻島の生間いけんまと瀬相せそうを結ぶフェリー「かけのま」、請島と与路島を結ぶ町営定期船「せとなみ」が発着している。一方、古仁屋漁港（第4種）も整備されており、奄美群島周辺で操業する漁船の避難港にもなっている。

2022年6月末時点の市街地の人口は4,842人（2,856戸）であった。瀬戸内町の本土側の

人口は 7,261 人なので、人口の 66.7%が市街地に集中していることになる。中心市街地には県立古仁屋高校、小学校、中学校、幼稚園、町役場、金融機関、医療機関、県の合同庁舎、海上保安署、宿泊施設、飲食店などが立ち並ぶ。



要塞司令部跡に建つ県立古仁屋高校（左）、市街地は鉄筋コンクリートのビルが多い（右）

旧古仁屋町北部

旧古仁屋町は市街地を過ぎると、海岸沿いに須手、手安、久根津、油井、阿鉄、小名瀬という小さな集落が続く。人口は何れも 100 人未満である。

県道 79 号を海岸沿いに北上し、大島海峡に沿って海峡の入口の西古見を目指す。

古仁屋港のすぐ西が須手（53 戸、85 人）の集落である。ちょうど洋上に軍艦が見えていた。船体番号は 403 と書かれている。後に自衛隊のホームページで調べると、「ちはや」という潜水艦救難艦であった。

手安（59 戸、99 人）の集落の手前に南部大島自動車学校があり、その背後の山側に旧陸軍の弾薬庫跡が今でも残っている。空き地に車を停めて見学に行くと、洞窟の中から外国人観光客が現れた。洞窟内の照明をつけるスイッチの位置を教えてくれたので、ライトをつけ中に入る。この弾薬庫は山に横穴を掘り、2本の通路の奥にコの字形に地下施設が掘られ、さらにもう一本直線状のトンネルがあった。弾薬庫は合わせて 3 室になる。1921（大正 10）年から建設が始まり 1932（昭和 7）年に完成している。案内板によると、鉄筋を網目状に組み、厚いコンクリートで固め、さらに銅板を張り巡らせ、湿気防止のために二重構造にするなど、当時の弾薬庫としては最も優れた施設だったという。

次の久根津（35 戸、65 人）集落には比較的規模の大きなコンクリート製品の工場があった。集落を過ぎた道路脇に㈱マルハニチロアクアの奄美事業所久根津漁場があり、クロマグロとカンパチなどを養殖している。事務所の入口に「関係者以外立入禁止（有）奄美養魚」と書かれた立て札がたっていたので、もとは(有)奄美養魚という会社だったのであろう。最近、マルハニチロが買収したものと思われる。設立は 1977（昭和 52）年なので、かなり歴史がある。事業所の傍を通るとかなり不快な臭気が漂っていた。久根津トンネルは通らず、旧道を大きく迂回し、養殖場の写真を撮った。

この久根津には 1912（大正元）年に東洋捕鯨㈱が捕鯨の根拠地を置き、捕鯨業が活況を呈する時代もあった。鯨の解体処理場では 70 余人の解体夫が働き、キャッチャーボート 3 隻にノルウェー人の砲手が乗り込み、多い時には 1 日にマッコウクジラ 9 頭を捕獲したこ

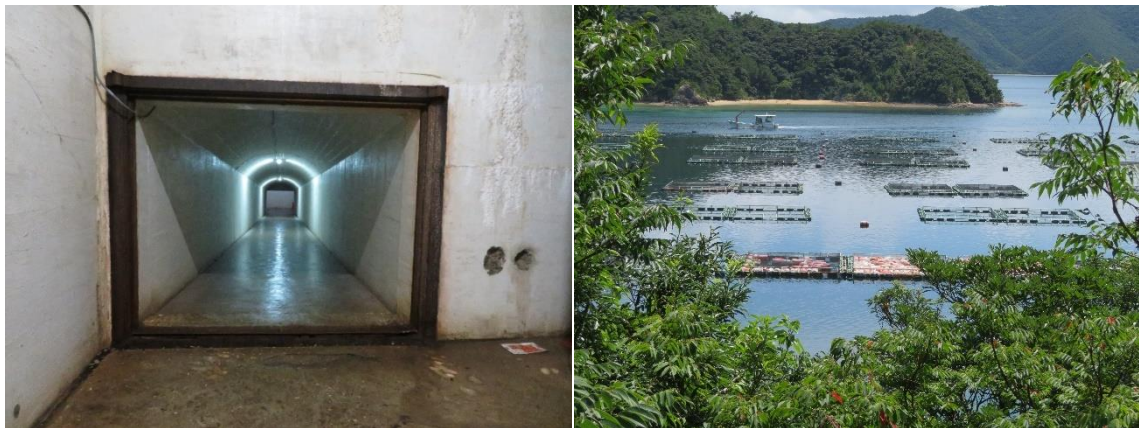
ともあるという。その後、南氷洋へと転向、さらに戦争で中断する。昭和 30 年代に入って再開されたものの 1961（昭和 36）年 4 月には撤退している。

久根津の次が油井（31 戸、47 人）の集落で、ここには油井小中学校が置かれている。この沖に後述するマベ真珠養殖の発祥の地である油井小島（現在は無人島）が浮ぶ。

次の集落が阿鉄（27 戸、44 人）である。集落の中央に小さな川が流れ、川沿いに家が並ぶ。背後の山裾にかけてわずかばかりの農地がある。集落先の小さな半島の根元には古仁屋港油井地区の港があり、マスト付の双胴船が浮かんでいた。この阿鉄には旧陸軍海上挺進第 29 戦隊が置かれていた。

続く小名瀬（13 戸、20 人）は旧古仁屋町海峡側の集落のなかでは最も小さい。河口干潟の西側に家が点在する。ここまでが旧古仁屋町になる。

この間、まともな漁港はない。突堤にせいぜい数隻の小舟が停泊しているだけだったから、企業養殖を除くと、個人経営の漁業はあまり営まれていないものと推定される。



手安の旧陸軍の弾薬後跡（左）、(株)マルハニチロアキアの久根津漁場（右）

農産物直売所と農業

小名瀬から阿室釜の間の県道は少し海から遠ざかる。この内陸部にドラゴンフルーツの農園があった。ドラゴンフルーツはサボテンの一種で赤い皮に包まれ、果肉は白くゴマ粒のような黒い種子がある果物である。この熱帯性の果物は最近、沖縄や鹿児島県の島嶼域でもつくれるようになっており、房総半島でもハウス栽培の農家が現れている。この農園には無人の直売所があったので、2 個を 500 円で購入した。

少し手前の久根津には「ほ～らしゃ市場」と称する農産物の直売所があった。中をのぞいたがたいしたものはないので、買い物はしなかった。この他にも道路脇には無人の農産物直売所がけっこうあって、「地産地消」ののぼりが立っている。

ここで簡単に瀬戸内町の農業について簡単にふれておこう（2018 年 3 月末時点）。

瀬戸内町は島の大部分が山地であり、耕地面積は 351ha と町の総面積の 2.6%に過ぎない。畑が 237ha で最も多く、樹園の 87ha、牧草地の 26ha がこれに続き、田は 1 ha である。

農業生産額が最も多いのが肉用牛の繁殖で、子牛出荷額は 2.5 億円である。本島内では奄美市笠利町に次ぐ。これに果樹が 2.0 億円と続く。つまり、瀬戸内町の農業生産は子牛の繁殖と果樹栽培がメインである。なお、生産されている果樹はパッションフルーツ、タンカン、マンゴー、ポンカンなどである。

瀬戸内町には 1963 (昭和 38) 年に日産 15 トンの生産能力を有する拓南製糖の瀬戸内工場ができ、含みつ糖の生産を始めた。翌年には生産能力を日産 20 トンに拡充し、分みつ糖の生産に切り替わる。しかし 1971 (昭和 46) 年には原料不足から操業休止に追い込まれた。製糖工場の閉鎖に伴い、奄美大島南部 (瀬戸内町、宇検村、旧住用町) のサトウキビ生産量は激減することになった。1965 年当時、奄美大島南部では 3,294 戸がサトウキビを生産し、収穫面積は 443ha であったが、拓南製糖の事業閉鎖後の 2001 年には 95 戸、35ha に激減している。現在、瀬戸内町のサトウキビ生産は加計呂麻島がメインで、本土側はきわめてすくない。



農産物直売所 (左)、ドラゴンフルーツの農園 (右)

篠川湾

阿室釜^{あむろがま}から先は旧西方村になる。海岸沿いに阿室釜、篠川、古志、久慈、花天、管鈍、西古見の 7 つの集落が点在している。

篠川湾の湾奥に面する最初の集落は阿室釜 (28 戸、41 人) である。小さな川を挟んだ隣の集落が篠川 (72 戸、124 人) になる。篠川は摺勝^{すりがち}と越地^{こえち} (現在、人は住んでいない) の 2 つの小さな集落からなる。篠川は山間部を抜けて旧住用町に向かう県道 612 号の分岐点にあたり、旧西方村の中では一番人口が多い。

篠川は関取・明生の出身地で、道路脇のガードレールに関取を応援する横断幕が張られ、多数のノボリが立っていた。奄美大島とその属島は各集落に土俵があり、相撲の盛んな土地柄である。奄美出身の力士は明生を筆頭に 12 人おり、そのうち瀬戸内町出身は 3 人を占める。

篠川湾内では、(株)マルハニチロアクアの奄美事業所篠川漁場が置かれている。ここでは、クロマグロ、カンパチの養殖とマダイの稚魚を生産している。また種苗生産施設 (株)マルハニチロ養殖技術開発センター篠川支所) も併設されており、民間では最初となるクロマグロの人工種苗生産に成功している。なおこの漁場は 2003 (平成 15) 年 4 月に開設されたものである。

漁場は篠川湾内全体に広がっていて、湾奥からマダイの中間育成用小割生簀、カンパチ養殖用の角形生簀、マグロ養殖用の大型生簀の順に並んでいる。

篠川の集落には篠川小中学校が置かれている。令和元年 5 月時点の児童数は 15 人、生徒数は 3 人であった。ちなみにこれより先に小中学校はない。



関取明生の出身地・篠川集落に掲げられた横断幕(左)、㈱マルハニチロ AQUA の篠川事業所のクロマグロ養殖施設(右)

久慈湾

篠川湾から小さな半島を越えた先が久慈湾になる。

久慈湾の海岸沿いには古志(31戸、43人)と久慈(62戸、95人)の2つ集落がある。なお古志は浦と伊目の2つの集落からなるが、現在、浦には人は住んでいない。久慈地区と伊目地区には久慈漁港(第1種)が整備されている。久慈には小中学校があったが、現在は休校になっている。学校の跡地には建設会社の事務所が置かれていた。

久慈湾では西南水産(株)の奄美事業所と、マダイを養殖する(株)平祐^{へいゆう}という地元企業の養殖漁場が置かれている。西南水産(株)は2006年5月からニッセイグループに入っており、クロマグロを養殖している。久慈湾の養殖漁場は湾口部が中心になっている。



久慈湾の魚類養殖場(左)、漁港で生簀網の清掃作業をする(株)平祐の作業員(右)

久慈

久慈は大島海峡のほぼ中央に位置する。複雑なリアス式海岸を成した久慈湾は天然の良港であった。この久慈湾の中心集落が久慈(62戸、95人)である。旧西方地区の中では篠川に次いで人口が多い。この集落は1907(明治40)年に焼内村、1916(大正5)年に瀬戸内町となり、現在に至るが、長いこと行政の中心であった。集落内の中心部には久慈集落に関する年表が掲げられていた。

久慈は比較的早くから開けたところで、江戸末期には白糖工場がつくられ、明治前半には教員養成所がこの地に開かれた。また明治後期には海軍の燃料補給のための石炭庫や水を

供給するためのレンガ造りの水槽も置かれ、旧海軍の第 44 震洋隊格納豪跡などが残されている。

久慈は県道 79 号と県道 627 号の分岐点である。県道 79 号は峠を越えて、隣接する宇検村に通じる。

古志集落の一つである伊目と久慈の昼間あたりの埋立地にマダイ養殖に取り組む平祐の作業場が置かれている。この作業場の脇に、旧海軍のレンガ造りの水タンク久慈水溜跡が残されていた。この水タンクは日清戦争後の 1895（明治 28）年に建設されたものである。日清戦争に勝利した日本は下関条約で台湾を得た。この台湾への航路確保の上で久慈湾は軍事上の要港とされたのである。この地に補給用の石炭庫、番舎、水を補給するためのタンクがつくられた。山から引いた水はろ水池でろ過し、この煉瓦製のタンクに貯水され、船に供給されたのである。

この先に久慈小中学校が置かれていたが、子どもがいなくなり、現在は休校中である。

久慈の集落には久慈漁港（第 1 種）久慈地区、伊目には久慈漁港伊目地区が整備されているが、漁船はほとんど見られなかった。



旧海軍の水補給タンクだった久慈水溜跡（左）、休校中の久慈小中学校（右）

近畿大学水産研究所奄美実験場

県道 79 号は久慈から宇検村に向かい、久慈から瀬戸内町先端の西古見までは県道 627 号にかわる。県道 627 号をしばらく走った最初の集落が花天（6 戸、9 人）である。花天の集落は過疎化が進んでいる。入江の奥に集落を形成していたが、櫛の歯がぬけるように、空き地が目立つ。瀬戸内町のなかでは最も人口が少なく、限界集落になっている。

花天の入江の中央部に花天漁港（第 1 種）が整備されているが、係留されている漁船は 4 隻だけだった。

集落の先に近畿大学水産研究所奄美実験場が置かれている。地元からの要請に応じて平成 13（2001）年に開設されたものだ。花天の入江には角形の小割生簀とマグロ養殖用の大型の円形生簀が多数ならぶ。

陸上部には、事務所、種苗生産施設、宿舍が置かれ、職員 1 名が常駐していた。偶然、この職員に会えたので簡単に話を聞く。

この種苗生産施設ではマダイとシマアジの種苗を生産している。湾内には大型円形生簀と角形の小割生簀が配置されており、円形生簀ではクロマグロ、小割生簀ではカンパチとク

エを養殖している。

近畿大学の水産研究所は32年の歳月をかけてクロマグロの完全養殖に成功した(2002年6月)。クロマグロとクエの人口種苗は和歌山県の白浜の実験場から輸送し、この地で養殖している。

生産した種苗と成魚は、近畿大学がベンチャー企業として2003(平成15)年に設立した(株)アマリン近大(資本金1,000万円)が販売している。

この施設は学生の実地研修の場としても活用されており、前期と後期に分かれて、宿舎に泊まって実習を受ける。

花天の次の集落が管鈍^{くだづん}(18戸、22人)である。歯が抜けたように空き地が目立つ。集落の東前面には地方港湾の管鈍港が整備されているが、大きな漁船が1隻係留されているだけであった。港の西側には離岸堤が2基並んでいた。

この集落にはかつて管鈍小中学校が置かれていたが、現在は廃校になっている。



近畿大学水産研究所奄美実験場の建物(左)、クロマグロの養殖施設(右)

魚類養殖

リアス式海岸が続く大島海峡は、加計呂麻島が風を遮り、静穏域が確保されるとともに潮流が発達していて、給餌養殖に適した立地条件を有している。また水温が温かく年間を通じて20℃を下回することは少ないから魚類の成長が早い。

2018年漁業センサスによると、7つの経営体が大島海峡で魚類養殖に取り組んでいる。そして各事業体の拠点は出荷に便利な本島側に置かれている。7つの経営体は大手資本系の(株)マルハニチロアクアの2事業体(久根津、篠川)、ニッスイ系の子会社・(株)西南水産、近畿大学のベンチャー企業アマリン近大の4つと(株)平祐や(株)やしろ水産などの地元経営体である。

養殖漁場は南から大島海峡に面する久根津湾、篠川湾、久慈湾、花天湾などで、クロマグロ、マダイ、カンパチ、シマアジ、クエなどが生産されている。このうち瀬戸内町の魚類養殖で特筆されるのが、これまで述べてきたようにクロマグロの養殖である。上述した4事業体は何れもクロマグロを養殖している。

クロマグロの養殖は1985(昭和60)年にニューニッポ(現マルハニチロの子会社)が高知県の柏島で始めたのが嚆矢で、1990年代終わりごろから市場拡大とともに多くの業者が参入し始め、2000年代から養殖生産量は急増した。瀬戸内町では中谷水産が1993(平成5)

年に進出し、その後、(有)奄美養魚などが参入、瀬戸内町はマグロ養殖の草分けとなったのである。

クロマグロ養殖はその後順調に発展し、2010（平成 22）年には約 1 万トン、2019（令和元）年は 19,584 トンと倍増している。県別では長崎県が最も多く 36.7%を占め、次いで鹿児島県の 17.2%である。これに高知県、三重県、大分県と続く。鹿児島県の産地は奄美大島の瀬戸内町（大島海峡）と宇検村（焼内湾）であり、とりわけ瀬戸内町が圧倒的に多い。ちなみに 2013（平成 25）年までは鹿児島県がトップの座にあったが、瀬戸内町では環境保全の観点から養殖規模を広げなかったことから停滞、一方、漁場を各地に広げた長崎県が 2014 年からトップの座を走っているわけだ。

瀬戸内町の漁業者は古仁屋に事務所を置く瀬戸内漁協に組織されている。同漁協の 2020 年度末時点の組合員数は、正 124 人、准 103 人の合計 227 人であった。一方 2018 年漁業センサス時の瀬戸内町の漁業経営体数は 46 で、うち会社組織が 9、個人経営が 37 であった。会社組織のうち 1 社はクルマエビ養殖の会社で上述したようにすでに倒産している。もう 1 社は後述する真珠養殖の会社で、残りの 7 社が魚類養殖を営む。

個人経営体数に比して組合員数が圧倒的に多いこと、組合員数と漁業就業者数がほぼ同じことから、養殖会社に雇われている現地の人々は組合員になっているものと推定される。鳥居（2011）は、大手養殖資本の参入により「大手資本からマグロ養殖を委託され、月給制で働くことを選択する養殖業者も見られるようになり、実質的な雇用労働者となっている」としている。

大島海峡の区画漁業権者は瀬戸内漁協であるから、上述した魚類養殖を営む外部資本は区画漁業権の行使料を漁協に支払っている。鳥居（2011）は、区画漁業権海域の 80%近くが外部資本によって行使され、この行使料収入と外部資本による購買事業収入（重油や漁業用資材など）によって瀬戸内漁協の経営が維持されている状況としており、この現実は今も変わらないし、より強まっているものと推定される。

なお 2019（令和元）年度の瀬戸内漁協の漁業生産量は 407 トン、生産額は 2.48 億円であった。この中には加計呂麻島と請島、与路島の分を含む。一方、養殖生産分は含まれない。なお瀬戸内漁協の組合員が営む漁業は一本釣り、曳縄などの小規模な漁業が中心である。

真珠養殖

瀬戸内町の魚類養殖と並ぶもう一つの産業が真珠養殖である。ただ瀬戸内町の真珠母貝は一般的なアコヤガイではなく、マベガイを母貝としている。なおマベガイは核を入れてもすぐに吐き出してしまうので核を貝殻の内側に接着させる。このためアコヤガイのように円形にはできず半円形である。しかしその輝きが美しいことから愛好者も多い。

大島海峡の北部海域を海岸線に沿って走っていると、クロマグロを始めとする魚類養殖の生簀をたくさん見ることができ、それに交じって真珠養殖の延縄施設も目立つ。

この真珠養殖を手掛けているのが、古仁屋に本社のある奄美サウスシー&マベパール(株)である。同社は、加計呂麻島の三浦年勝、知之浦、瀬戸内町の手安（以上大島海峡）、宇検村の名柄（焼内湾）の 4ヶ所に養殖漁場を有している。

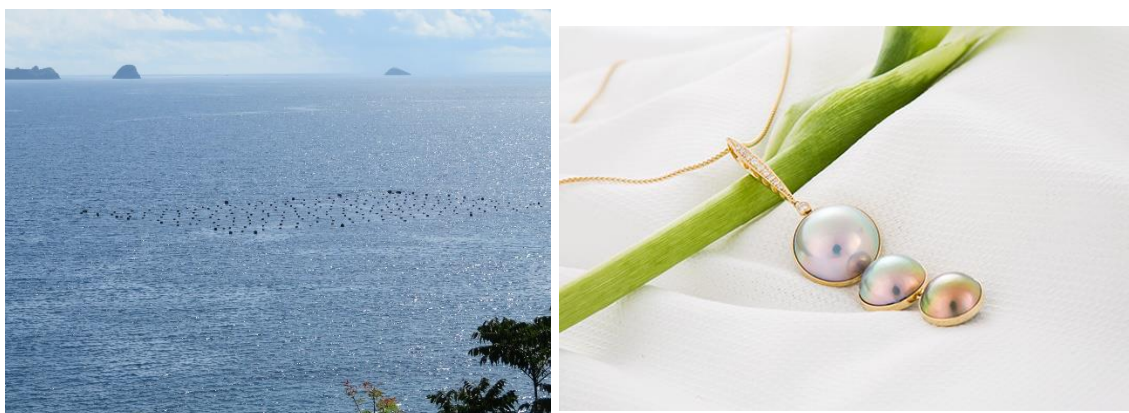
ここで瀬戸内町におけるマベ真珠養殖の歴史を振り返っておこう。

1890（明治 23）年にマベガイが大島瀬戸に生息していることが発見される。当時はマベガイを採取し、天然の真珠を獲る漁業として注目されていた。マベバイは岩などに付着しているため、潜水器漁業で採取した。

その後、1910（明治 43）年に油井小島と俵小島で、伊谷壮吉と池畑末吉の共同事業としてマベの養殖が開始された。御木本幸吉の真珠養殖に刺激を受けたものだ。しかし 1923（大正 12）年には中村十作（宮古島における人頭税廃止に尽力）に事業を譲渡し、中村は 1925（大正 14）年に油井小島で半径真珠の養殖に成功した。油井小島で働いていた人は請島の請阿室地区の人が中心だった。中村は挿核技術が外に漏れるのを恐れて、1人でやっていたという。

しかし、戦争で事業は中断。戦後、1951（昭和 26）年に光塚喜市が奄美真珠海綿養殖株式会社を設立して、マベ半径真珠養殖事業を開始、翌年には実久真珠株式会社も参入している。しかし、当時は母貝を天然のマベに依存していたから、乱獲がたたり母貝を確保できなくなって実久真珠株式会社は撤退。奄美真珠海綿養殖株式会社は鹿児島県水試大島分場との共同研究を開始し、1958（昭和 33）年にマベの人工採苗に成功した。

天然母貝に依存せずに養殖ができるようになったことから、マベ真珠養殖に参入する業者は 10 社以上に増えた。しかし真珠不況が産地を襲うなか、養殖業者は相次いで撤退。最後まで残ったのが田崎真珠株式会社であった。しかしこの田崎真珠株式会社も乗っ取り騒ぎなどに翻弄され、2009（平成 21）年に撤退することになった。なんとか瀬戸内町にマベ真珠を残そうと同社に勤務していた人達が立ち上げたのが奄美サウスシー&マベパール株式会社なのである。



マベ真珠の養殖場（左）、マベ真珠の製品（奄美サウスシー&マベパール株式会社HPより引用）（右）

西古見と旧陸軍観測所跡

瀬戸内町の最西端の集落が西古見（^{にしこみ}22 戸、27 人）である。狭い窪地に集落が形成され、^{ぐすく}城、^{こぎと}古里、^{かねく}兼久、^{いふ}伊婦の 4 つの地区に分かれている。各家の塀は与路島と同様、サンゴ石が積まれている。この集落の歴史は古く、西郷隆盛が徳之島に流される途中、悪天候のためこの集落に宿泊したと伝わる。かつて西古見小中学校があったが、子どもがいなくなり、1985（昭和 60）年に廃校になった。

集落の前に西古見漁港（第 1 種）が整備されている。北西側に小さな山があり、風よけの役割を果たす。漁港中央の埋立地がヘリポートになっている。漁船は見当たらなかった。集落の背後にわずかばかりの農地があるが、あまり利用されていない。

西古見は奄美群島でカツオ釣漁業と鰹節生産が初めて行われた土地だった。1898(明治29)年に鹿児島県肝属郡佐多町(佐多岬灯台のあるところ)から、最北端の曾津高崎の灯台工事でやってきた土持畝助はカツオの漁場として有望と目を付けた。故郷に帰ると1899(明治32)年に再びやって来て、カツオ漁業を行いすばらしい成果を上げる。その後、地元の朝虎松は地区の同志22名を集めて組合を結成、1901(明治34)年には「宝納丸」を建造し、地元資本によるカツオ漁に乗り出した。

当初は帆船であったが、大正年代に入ると動力船に代わり、最盛期にはカツオ1046千貫(3923トン)、鰹節156千貫(585トン)を生産している。しかし1926(大正15)年に西古見のカツオ漁船2隻が遭難し、乗組員28名が死亡、以降、カツオ漁業への意欲を失い、年々衰退していったという。

ここから小さな湾沿いの道(県道627号)を進むと、道路脇の木々に埋もれて、鉄筋コンクリートの建物跡が現れた。旧陸軍の弾薬庫跡らしい。

その先の見晴らしのいい場所に旧陸軍の観測所跡がそのまま残されている。1940(昭和15)年に旧日本陸軍が建設したもので、「せんがいの掩蘆観測所」と呼ばれた。トーチカのような建物で、この中に隠れて敵艦を見つけ、射撃目標の方向と距離を測定し、山陰に設置された砲台に連絡する役割を担っていた。建物の内部にも入ることができ、鉄筋コンクリート製の建物は今でも使えそうだ。この場所は草木に覆われて外部からは全く見えないようになっていたが、2004(平成16)年に周囲の草木を刈ると、全容が現れたらしい。

ここから曾津高崎を回って焼内湾側の屋鈍(宇検村)に至る道もあるが、「慣れない人には無理だ」といわれていたので、Uターンし、久慈の集落まで戻り、峠を越えて宇検村に向かった。ちょうど峠あたりの町境になる。峠から先は宇検村の広域基幹林道になった。坂を下りた先が名柄の集落である。焼内湾沿いの県道79号を湾奥に向けて走り、この日の宿の「やけうちの宿」に着いた。



西古見集落のサンゴ石の塀(左)、トーチカのような掩蘆観測所(右)

【文献】

鳥居淳司(2011): 瀬戸内町漁協における漁協経営改善の取り組み. 南太平洋海域調査研究報告, No. 52, 31-35.

山本尚俊(2012): マグロ養殖業の歴史的展開と今後の展望. 長崎大学水産学部研究報告 第93号, 59-77.

瀬戸内町教育委員会(2017): 瀬戸内町内の遺跡2 近代遺跡分布調査編. 瀬戸内町文化財調査報告書第6集, Pp. 115.

瀬戸内町誌歴史編さん委員会(2017): 瀬戸内町誌歴史編. 瀬戸内町.